

### \* 東京天文台 26 吋望遠鏡ドームの窓、そして育苗場の痕跡

アーカイブ室新聞 170 号で東京天文台 26 吋赤道儀望遠鏡ドームに窓があったという記事を書いた。さっそく反響があり、もっと鮮明な写真 (写真 1) を普及室の小池氏が提供してくれた。この写真には驚くべきことが何点かある。



写真 1 ドームの窓がはっきりと写った昭和 20 年以前の写真

写真 1 には、1) 26 吋望遠鏡ドーム手前に大きな水ダメが 2 個写っていること、2) 写真右端に昭和 20 年 2 月に焼失した本館の一部が写っていること、3) ドームの右後方に連合子午儀室が写っていること、4) 連合子午儀質の左には旧図書館が写っていること、5) ドーム左はるか後方に高い鉄塔が立っていること、6) そして何よりドーム周辺の木々の背が低い事である。

明治 42 年度末には、三鷹村に 73,284 坪の土地を購入している。明治 42 年 10 月には民有地 7589 坪の寄付があり、またその後 4 回に亘って内務省から管理換えによる土地の交付があり、合計 92,890 坪の土地を入手した。その頃、南側斜面に近い辺りは、東京府の育苗場だったといわれており、苗に水をやるための水ダメが幾つもあった。写真 1 にはその水ダメ 2 個が写っている。この水ダメが育苗場だったことを示す証拠でもある。この水

ダムは現在でもドーム南側の森のなかに残っており、ドブ水がたっぷりと溜まっている（写真 2）。長年にわたって落ち葉を貯め、雨水を貯めてきたからきっと底なし沼状態だと思える。写真 1 の左の水ダムはその縁の高さが地面と同じになっており、落ち葉で覆われているから、落とし穴状態である。森に分け入る人は注意が必要である（写真 3）。



写真 2 現在も残る育苗用の水ダム



写真 3 地面と同じ高になった水ダム

天文台構内を武蔵野の面影を残した「武蔵野の森」という人がいるが、この地は一面の見事な畑地であったのである。筆者が昭和 41 年に三鷹に転勤で来た頃は、塔望遠鏡で観測するために木々はある程度の高さで切り払われ、塔望遠鏡ドームのテラスから 26 吋ドーム、北研究棟が見えていた。そして牧田さんから木々の高さの管理をせよとも言わ

れていた。筆者の三鷹での最初の仕事は、塔望遠鏡を生き返らせることであった。ツアイス製の配電盤のヒューズ類が入手できず、塔望遠鏡が使用不能になっていたところを、大理石で出来たツアイスの配電盤を木の板で作った細工のやりやすい配電盤に交換し、電気部品を秋葉原で調達し、塔望遠鏡を生き返らせた。そして暫くは守山さん、平山さんなどがスペクトル観測を行っていたが、間もなく塔望遠鏡の後継機である 65cm 太陽クーで望遠鏡が岡山天体物理観測所に完成し、塔望遠鏡の使命は終えた。

写真1のドームの窓を見た「すばる」開発のメンバーの一人だった三上君が、これは「フラッシングドーム」と言えるのではないかという。「すばる」は究極の地上でのイメージを目指しいろいろ研究を重ね、望遠鏡空間の大気を外気と同じにする工夫で「フラッシングドーム」にしたのであった。フラッシングのためにドームを円柱型にし、風向きに寄らず風が吹きぬけるようにたくさんの窓を付けたのである。

26 吋望遠鏡ドームの窓の目的は、その建設工事の指揮を取った橋元昌矣の天文月報記事にも触れられていない。このドームに窓があることを聞いた際、明り取りとしか思いが至らなかった。この窓が開けるようになっていたか調べてみたい。

昼食時、「すばる」の開発研究の当初の頃の仲間であった西野君と話していて、この窓の目的は、昼間、暖まった空気を早く外に出すため、あるいは昼間ドーム内の温度が上らないよう暖まった空気を抜いていたのではないかという意見であった。最近のドームの屋根は2重構造になっていて、その空間を昼間暖められた空気を抜くようになっている。しかし26 吋望遠鏡ドームの内張りは木製で2重構造にはなっていない。ドームの設計もツアイスで、施工は石川島播磨造船所であった。大きな構造物は造船所が得意であり、大型望遠鏡のドームの多くは造船所が作っている。

その他の興味深い鉄塔などについては項を改める。